

神戸女学院学舎の建築史学（Ⅲ）

—岡田山キャンパスの建築的解説—

川 島 智 生

Architecture History of the School Buildings at Kobe College (Ⅲ)

—Architectural Elucidation of the Okadayama Campus—

KAWASHIMA Tomoo

Abstract

The most critical characteristic of Kobe college campus is the school courtyard: a quadrangle is adopted on the campus, and each of the buildings faces the front of the quad. The spatial attraction is that closed habitat of the school courtyard is decreased, because the EL of both the narrow side and the long side is around 15 degrees. Each of the buildings which face the quad is a three-storied façade, and this is the style common to all the architectures on the Okadayama campus. Furthermore, the buildings which face the quad slightly vary in their ornamental design, but there is nothing feels wrong. The characteristic of the physical planning is that there is a North-South axis, and architectures in the quad are classified into three groups by the primary function. The unity of the scenery of the campus was formed by adopting the design of the buildings that were constructed in 1933 in all the buildings that have been constructed since then.

キーワード：配置計画、クワドラングル、建築間の関係性、建築スタイル、キャンパス計画

Key words: site plan, quadrangle, architectural relationships, architectural style, campus plan

元本学非常勤講師

連絡先：川島智生 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
tkawashima57@yahoo.co.jp

序

神戸女学院の学舎ならびにその建築の一群から構成されるキャンパスについては、ある種の完成された「うつくしさ」がある。しかしそれがどのようなレベルにあって、どのような基準にもとづくものなのかを考えれば、その内容についてはそう簡単に論じられる問題ではないことに気付く。すくなくともこのことに関して、これまで科学的に分析された客観的な内容は管見のかぎりにおいてはない。

そのことと関連することにキャンパスの「顔」という問題がある。一般的に大学のキャンパスは特徴的な建造物が「顔」になることが多い。東京大学だと安田講堂、京都大学だと時計台、慶應大学だと図書館、早稲田大学だと大隈講堂、関西学院大学だと時計台の図書館と、もちろん厳密に分析をおこなえば、より詳細な検討が必要だろうが、それぞれキャンパスの顔といえるものが挙げられる。

ところが、神戸女学院にはこれといった決定的な建物の顔、すなわち明確なファサードを「誇示」する建築は見出せない。神戸女学院ではいったいどこにキャンパスの中心があるのだろうか。外部からのアプローチという観点で考えれば、講堂の車寄せ正面か、あるいは音楽館の正面がキャンパスの顔とも一見みえるが、実は講堂の南西側に位置する中庭側の4つの建物が織りなす場所こそが、このキャンパスのかなめの空間ではないだろうか、と筆者は考える。なぜなら、この中庭に面した建物はいずれもが、この中庭にすべて正面を向けている。どうやらここに、神戸女学院のキャンパスの有する「うつくしさ」の秘密を解く鍵がありそうだ。

周知のことだが、神戸女学院は昭和8（1933）年に神戸山本通りから移転してきた。わが国において戦前期までにつくられた高等教育施設のキャンパスを考えれば、昭和戦前期までにつくられた歴史的建造物を持つ大学はこの三十年間に取り壊しがあったものの、およそ100校を超えるものがあると考えられる。けれど、神戸女学院のように一挙に建設された事例は少ない。そのため、歴史的建造物の多くはキャンパス内に、「点」として存在することが多い。一例をあげると同志社大学では、個々の建築については国指定の重要文化財があるものの、全体として建設の時期にはばらつきがある。むろんそれは学校の歴史を物語る重層的なものと考えられるが、統一性という観点には欠ける。神戸女学院の山本通りのキャンパスはこのような増改築のプロセスを示すものだった。

それに対して、神戸女学院の岡田山キャンパスは、ある時に一挙につくられた。そしてその時に組み立てられた建築的な枠組みがそのまま、今まで「面」として残され、継承されている点に特徴がある。たしかに東京大学や一橋大学などにおいても大正末期から昭和初期に關東大震災による被災後の復興キャンパスとして、一斉に建設された建造物を有する。また立教大学や関西学院大学、東京女子大学、津田塾大学のように大正から昭和戦前期の学舎を比較的よくとどめる私立大学もある。そのように歴史的建造物を有する学校のなかで、神戸女学院に対して、いったいどのような位置付けをおこなうことができるのだろうか。

では何がこのキャンパスならびに学舎の特質なのかを突き詰めれば、岡田山全体のなかでの軸線と各建物の配置、クワドラングルと校舎の関係性、校舎の有した歴史的建築意匠などが想定される。本論文ではこれらの事象をキーワードとして、このキャンパスならびに学舎の一群を読み解き、建築学的解明をおこなう試みである。先行する研究としてはヴォーリズ研究の一環によるもの¹があるものの、個々の建築について詳細な研究はない。本研究は神戸女学院学舎の建築史学²を形成するものであり、続稿として、学舎の細部の意匠や設計理念の解説をおこなう予定である。なお、本研究は神戸女学院大学の研究助成「神戸女学院と芸術」による助成を受けている。

1. 配置の手法

キャンパスの「顔」の探求である。それがどのようにして形成されていったのかを見る。キャンパス全体を考えれば、岡田山を南北に貫く一本の軸線がキャンパス計画の根幹となっていいる。しかも平面という視点だけではなく、岡田山という段丘のもつ地形の高低差を巧みに読み込んだ配置計画がなされていたという特徴がある。また、歩行とともに景観が劇的に変容するなど、飽きさせないような工夫がなされた有機的な動線計画が用いられている。

1) 南北の軸線

外部との連絡路として、当初、メインゲートとしての正門、北門、東門³の計3ヶ所からのアプローチが設定されていた。ただしこの東門は現在の谷門にあたり、階段ゆえに自動車による通行はできなかった。ということは、正門と北門が外部の道路と通じたゲートだった。つまり、ほぼ南北軸に軸線が設定され、キャンパス内を縦断する唯一の道路になっていたことがわかる。

この道路計画は昭和5（1930）年7月16日に開かれた建築委員会のなかで、「新敷地計画」案のひとつとして設計者ヴォーリズによって提案され、同年11月26日の臨時理事総会で承認された。その内容とは次のようなものだった。

「村道から、各校舎に通ずる表道はすでに敷設され、或個所は従来の道をひろめ、或個所は全然新設し、勾配をゆるめ、自動車の通り易い様に、よいカーブがつくられました。」⁴

ここでいう村道とは甲東村が所管した道を指すが、その下までは県道（現在の国道171号線）が来ており、そこで繋がる。なお、この軸線はかつてここにあった旧尼崎藩主の桜井子爵の別邸時代の道路を踏襲⁵している。すなわち尾根部分に設置されていた道路がほぼそのまま利用されることになった。その道路がそのまま北方向に伸びることで軸線が形成されることになった。

神戸女学院内の各建物はこの道路に直接面するのではなく、そこから枝分かれしたクルドサック⁶状の道によってアクセスするようになっている。そのことをもっとも象徴的に示す空間が、中庭ならびにそこに面する4つの建築である。自動車でのアプローチは各建物の裏面と

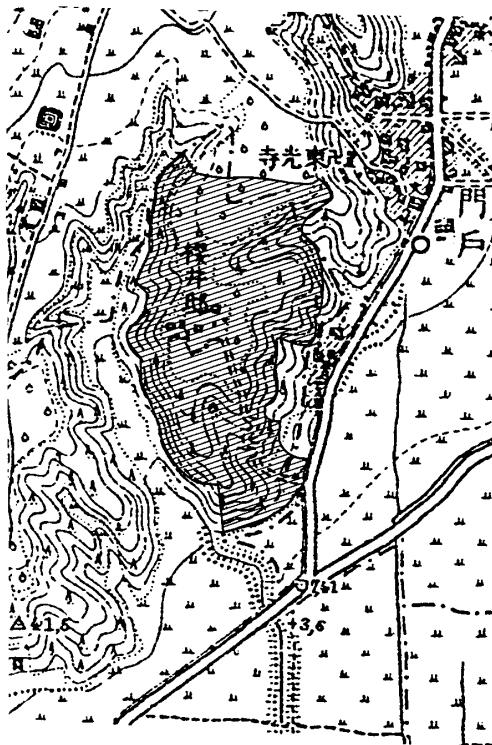


図1 神戸女学院以前の岡田山付近の地形図（1909年、大日本帝国陸地測量部作製の地形図1万分の1）

備考：縦線のハッチ部分は現在の岡田山キャンパスの位置を示す

もいうべき、中庭とは反対の面にあって、しかもそれは一部の出入り口に繋がっているのにすぎない。

現在ではキャンパス全般にわたって自動車でアクセス可能な範囲を限定しており、通常は大正天皇が皇太子時代に訪れた御野立所⁷があった段丘上の駐車場あたりまでとなる。

2) 3つのゾーン

設定された軸線にそって、機能別にほぼ3つのゾーンが形成されている。それは地形的差異にもとづき設定されたものと考えられる。

南側からみると、第一ゾーンを形成するのは音楽学部である。谷の入り口に正門があり、そこから谷間を進めば少しひらけた場所にでる。そこにはロータリーを前面に設けた音楽館が配されている。音楽館はこの間のアプローチ上のアイ・ストップを形成し、最初に目に入る建物となる。なぜ、このように音楽学部だけを別のゾーンに分けたのかを考えれば、ピアノをはじめとする発生する音の問題があったと判断できる。音楽学部をほかの学部と近接させれば、ほかの学部で学ぶ学生たちの気をそらせてしまう。そんなことが配慮された結果だろう。その代わりにその校舎は神戸女学院の建造物のなかではもっとも高層で、塔がそびえる建物となつた。つまりたったひとつ単体で建つために、より華麗な装飾が求められたと考えられる。

次に現れてくるのは、平坦になった段丘の上に展開される校舎群である。第二のゾーンとなる。下から上がってくる道は、斜め方向から講堂の正面車寄せ前のロータリーに至る。南北の軸線の西側には中庭を囲む4つの建物が配される。ここでの建築については後に詳述する。そ

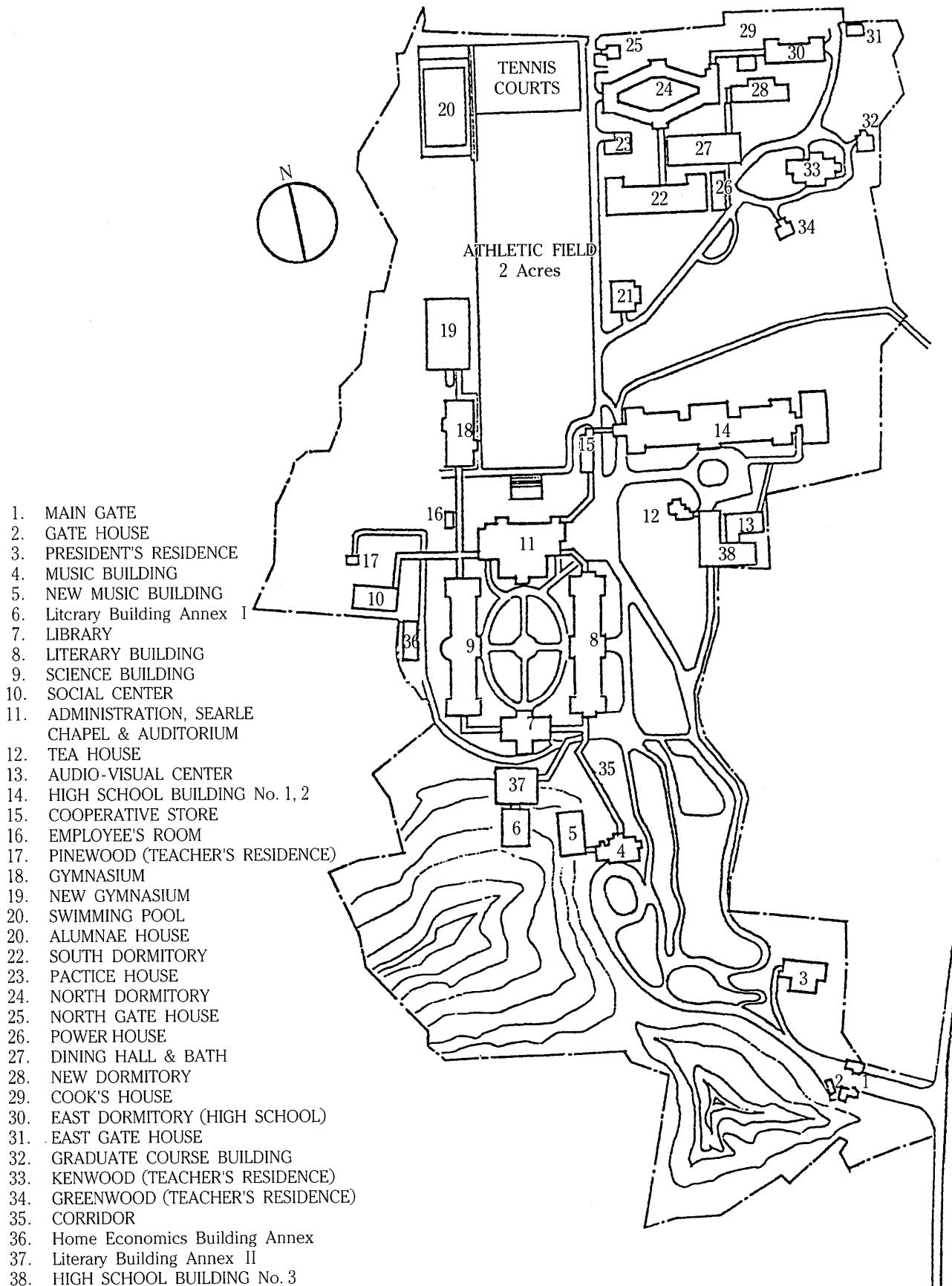
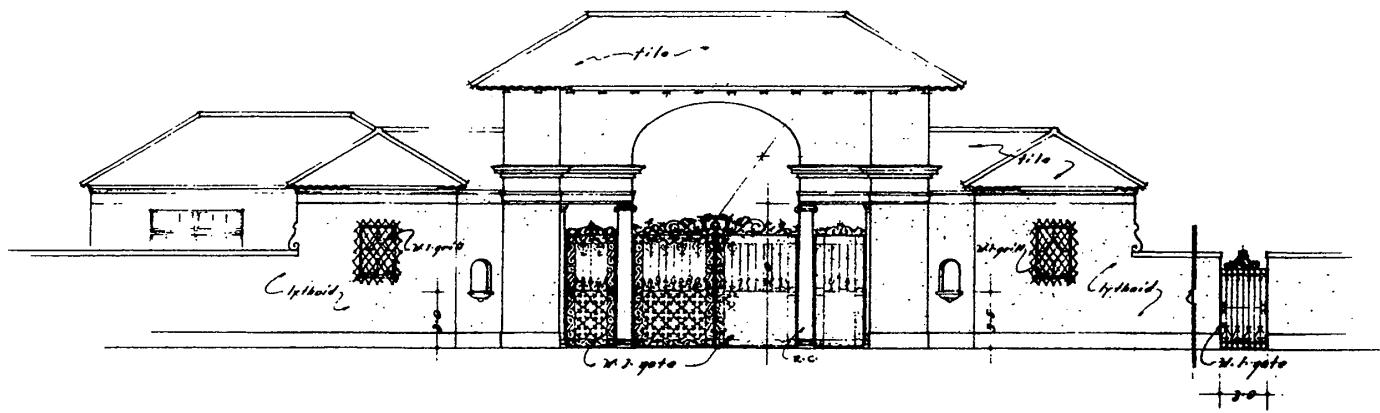
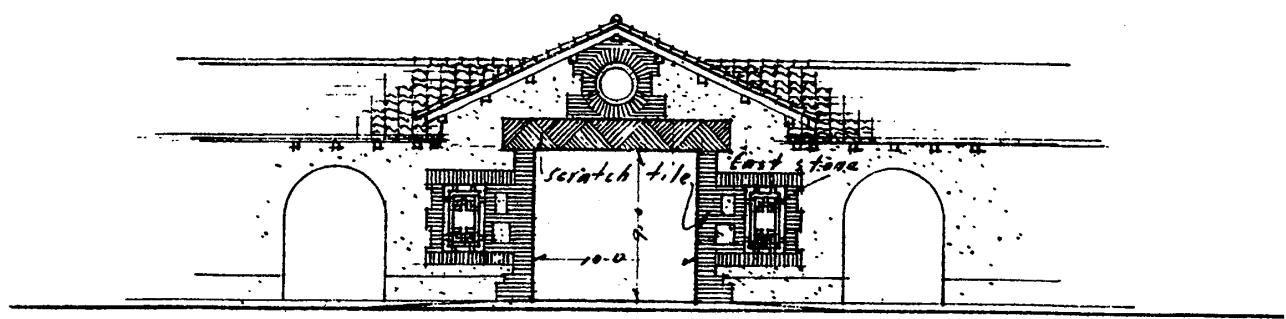


図2 竣工時の配置図



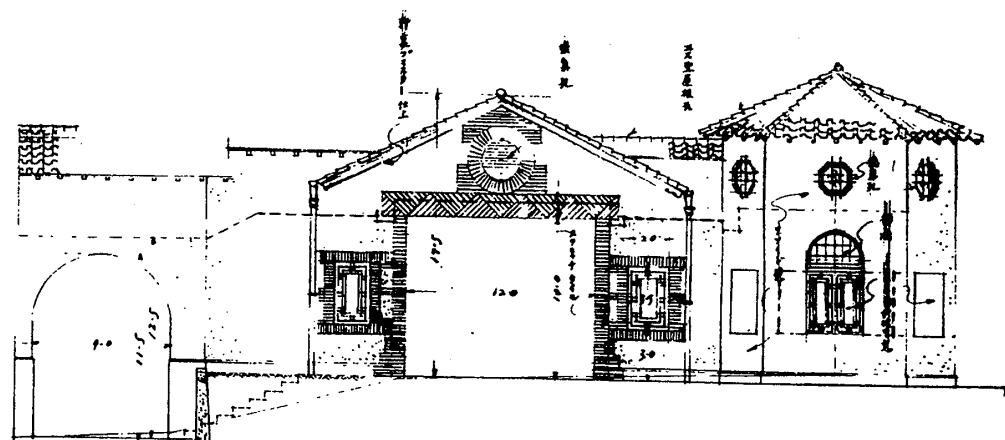
FRONT ELEVATION OF GATE LODGE

正門



FRONT - ELEVATION -

中庭への門



南側平面図・%o

居住ゾーンへの門

図3 門の立面

の北側には体育館と運動場が設けられる。軸線を挟んで東側には中学校部と高等学校部がある。東側に突き出た尾根に沿って配され、当初は高等女学校としてつくられる。この中高部の建物の正面には当初は車寄せがあって、その前面はロータリーとなる。講堂は中高部と大学部とをつなぐ位置にある。その連絡通路が南北軸の道路と交差する地点にはゲートとなる建物があり、その西側にはコーポラティブ・ストア（現在は購買部）の建物が設けられていた。

そこから北側は学生寮や教員宿舎など、居住という別の機能のゾーンに変容する。第三のゾーンである。またこの地点は地形的な境界でもあって、高等女学校校舎の背面、すなわち南北の軸線の東側まで谷が入り込み、学舎のゾーンと居住のゾーンをわける。講堂の北面には広大な運動場がひろがる。敷地最北部には、学生寮が配置される。一番奥まった学生や教員が住む建物は、校舎が一様に鉄筋コンクリート造という石造りに似たものになっていたのに対し、木造構造になっている点に特徴がある。そこでは外壁にモルタルという僅か3センチメートルほどの石風の膜を塗りつけたものにかわる。なぜ、そのような使い分けがおこなわれたのかを考えれば、設計をおこなったヴォーリズは住宅については自邸も含めて、多くを木造でつくるており、居住という性格を考えてこのような選択がなされたものと判断できる。

以上考察してきたように、半島状に南に突出した段丘上に、音楽館を除く建物が配されることになったため、段丘下の傾斜地には木々が残ることになった。このことが岡田山という森を維持することに繋がっていった。

3) 歩行の動線と自動車のアプローチによる二重性

一般的にキャンパスへのアプローチ法としては、主に自動車による方法による。だが、神戸女学院では自動車による進入には限界があって、その内奥部の建物へは歩行によるアクセスしかできない構造になっている。つまりアプローチ法の使い分けがなされていた。ここに、このキャンパスの特質が求められる。

自動車によるアプローチから見ていけば、このキャンパス内には音楽館、高等女学校校舎、講堂の3ヶ所については自動車で乗りつけられるように、自動車回転用のロータリーが車寄せの代わりに設けられている。また、学生寮、教員住宅、については自動車が回転できるようなりング状配置が採用されており、自動車のアクセスが簡単にできるように計画されていた。ここでロータリーの意味を考えれば、ロータリーに面して正面性を強調したファサードが出現しており、そのような意味でそれぞれが神戸女学院の「顔」として設計されていたものと判断できる。

それに対して、図書館や総務館、文学館、理学館の4つの建物については、自動車の入構禁止の中庭に面して、4建物ともに正面を設け、玄関を配する配置となっている。すなわちこれらの4つの建築については、直接車道に晒されるのではなく、歩行によってしか到達できない内奥部に配置するという手法が用いられている。つまり建物へのアプローチの仕方が2種類あった。同一のキャンパス内において、このような差異がなぜ生じたのかについては、次章で詳述する。

歩行の動線をみると、車道と交差しながらも、独自の回路を校舎間に張り巡らせていた。屋

根と壁の付いた渡り廊下からなる歩行者専用通路である。中庭部分では既にみた4つの建物を結び、それ以外にすべての校舎間を繋いでいた。標高差のある南方の音楽館からみると、屋根付きの階段となるものの壁はない。東（高等女学校）・西（社交館）・北（雨天体操場）の3方については屋根と壁、窓の付いた通路となる。すなわち、いずれもの建物へ雨に濡れずに校舎間を移動できるシステムになっていた。その出発点には必ず門が設けられており、それは3ヶ所あった。1ヶ所目は先述の講堂前の中庭側出入り口、2ヶ所目は居住と学舎のはざまにあって、ゾーンを分ける役目も兼ねる。3ヶ所目は文学館南東の自動車転回の広場に面した場所であり、いずれもが三角形の破風を掲げ、スクラッチタイルによって開口部廻りが飾られることで、歩行者への玄関の様態を示していた。

渡り廊下は建築構造としては、木骨モルタル塗りの仕上げで、外壁はリシン搔き落とし仕上げ、屋根はスパニッシュ瓦が葺かれ、内部はトラスの小屋組をそのままみせるものになる。開口部は大アーチの引き戸となり、採光はところどころに空けられた窓から採られた。

4) 他校との比較

岡田山の神戸女学院の配置計画の位相について、筆者はすでに論じたが、比較したのは幻に終わったマーフィによる大蔵谷キャンパス計画だったが、ここでは明治大正期に創設されたふたつのキリスト教主義女子高等教育機関と比較してみたい。

明治44（1911）年に大学部を設けた長崎の活水女学院と大正7（1918）年に開校する東京女子大学がある。活水女学院は神戸女学院とほぼ同じ時期に創設され、キリスト教主義女学校ではわが国でもっとも早い時期に大学部を設け、高等教育機関に昇格していた。一方の東京女子大学はわが国のキリスト教主義女学校のセンターとなるべく新たに設置された高等教育機関であり、そのような意味でこの2校は神戸女学院と比較するにふさわしいキリスト教主義の女子高等教育機関と考えられる。

さて活水女学院をみると、神戸女学院と異なり、開校した同一の地に現在も存在するために、当初の校舎を建て替えることで、新しい校舎がつくられてきたという歴史がある。ここが神戸女学院とは大きく異なる。傾斜地という敷地のロケーションでは共通点はあるが、長崎の市街地に近く、そのような意味では岡田山に移転する以前の神戸女学院の山本通キャンパスの様態に近い。そこでは東山手という急傾斜の土地ゆえに地形に制約を受けた配置計画となり、敷地の狭隘も影響して、多くの教室が取れる高層化が可能な鉄筋コンクリート造が早い時期に校舎の建築に採用されていた。ただ、神戸女学院と同様に鉄筋コンクリート造ながらも、赤い色彩の傾斜屋根を設けており、それは地域のランドマーク的な建築となっている。その校舎はヴォーリズ建築事務所にも一時は在籍していたアメリカ人建築家、ヴォーゲル⁸という建築家によって設計され、大正15（1926）年に完成していた。

一方、東京女子大学は武蔵野の平坦な地にある。設計者はチェコ出身の建築家、レーモンド⁹だった。その敷地面積は2万坪で、神戸女学院が桜井子爵から購入した当初¹⁰の岡田山キャンパスの大きさとほぼ共通する。東京女子大学では敷地の手前に図書館を中心とした校舎群が配され、奥に寮というように、ふたつに機能分化されていた。神戸女学院も音楽学部と中庭の校

舍群をあわせれば、共通するゾーン分けと捉えられる。

東京女子大学では全部で6棟からなる広大な寮の計画¹¹があって、その形状は塔屋のある建物を中心に放射線状に各寮が配置されるものだった。大正13（1924）年に東寮が実際に建設されていた。おそらくはヴォーリズは神戸女学院の設計時に東京女子大学のキャンパス計画の内容を知っていたものと思われる。岡田山の神戸女学院は全寮制ではなかったことで、東京女子大学ほどには寮は必要なかったが、2棟の寮が建設される予定だった。その寮の平面形状は南北に圧された菱形をなし、放射線状に張り出された東京女子大学の寮の配置形状にある意味で影響を受けていた可能性も考えられる。

2. 中庭と建物

神戸女学院にあって、そのキャンパスを論じる際に、もっとも特徴的な事象は中庭に面して配された4つの建物と中庭のありようである。ここにかくも魅力的な空間が現出した理由は3つが考えられる。第一は中庭と中庭に面する建物の位置ならびに建物の高さの関係にある。本章でみる。第二はキャンパス全体の建築にわたっていえることだが、建物のファサードの意匠ならびに素材であり、次章でみる。第三は前章で論じたアプローチの手法である。

1) 中庭の意味

神戸女学院の中庭を論じるにあたって、次の2つの大きな特徴が挙げられる。

第一は講堂前のロータリーに面した渡り廊下（北東部）に設けられた出入り口を除いては、外部と直接に繋がっていない四角形の中庭、クワドラングルが現出していることである。4つの建物とそれを繋ぐ渡り廊下によって、なかば閉じられた口の字型の建物配置が実現していた。この4つの建物の1階部分はいずれもが中廊下式の配置となり、真ん中を廊下が通る。すなわち、渡り廊下で繋がれ、中庭を取り巻く廻廊と化す。このような事例は管見のかぎりにおいて、ヴォーリズの学校建築では他に類例を見ない。中庭形式を有する校舎は、明治から昭和戦前期にかけての公立小学校¹²校舎でみられるが、このような動線計画を有したものではない。

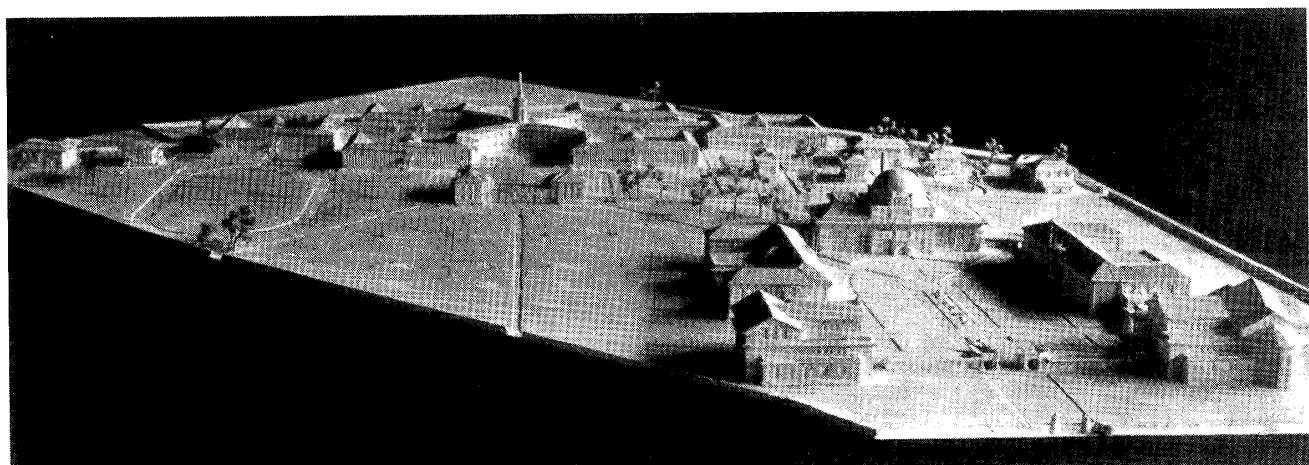


写真1 「東京女子大学の模型」

出典：アントニン・レーモンド『自伝アントニン・レーモンド』鹿島研究所出版会、1970

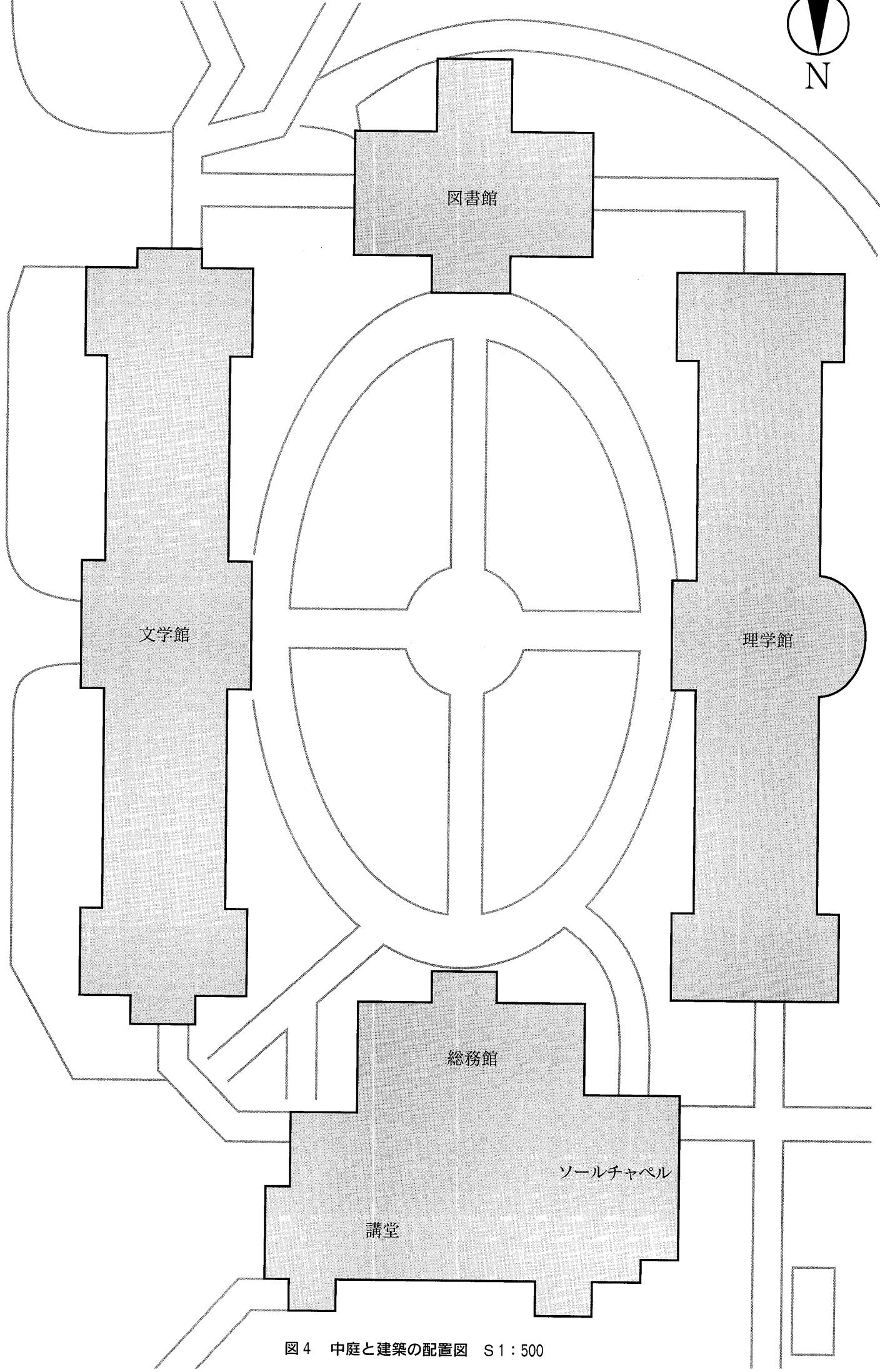


図4 中庭と建築の配置図 S 1 : 500



写真2 中庭入口



写真3 中庭

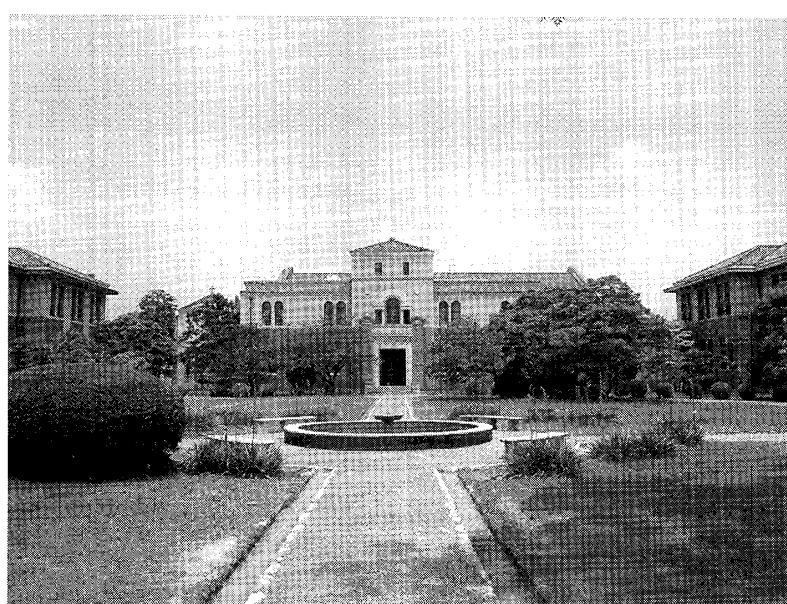


写真4 中庭と総務館



写真5 図書館



写真6 ソールチャペル



写真7 文学館



写真8 理学館



写真9 講堂



写真10 音楽館

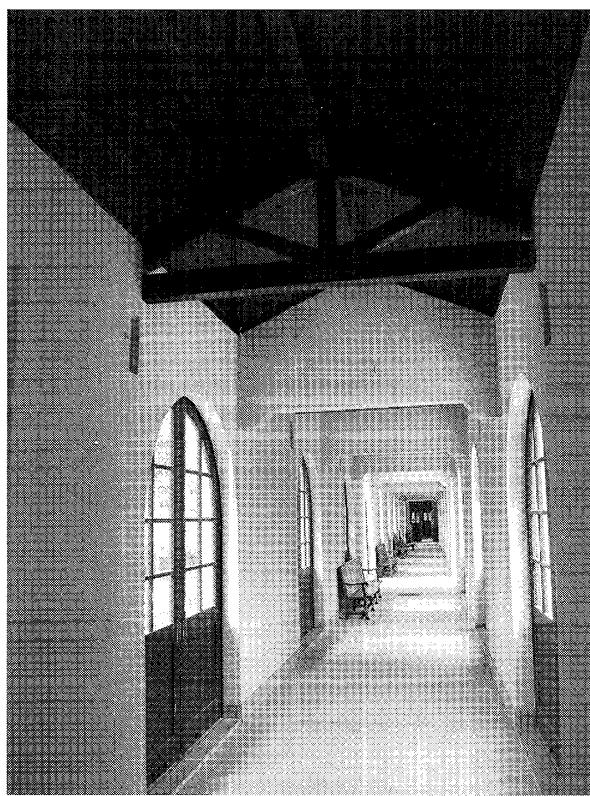


写真11 渡り廊下

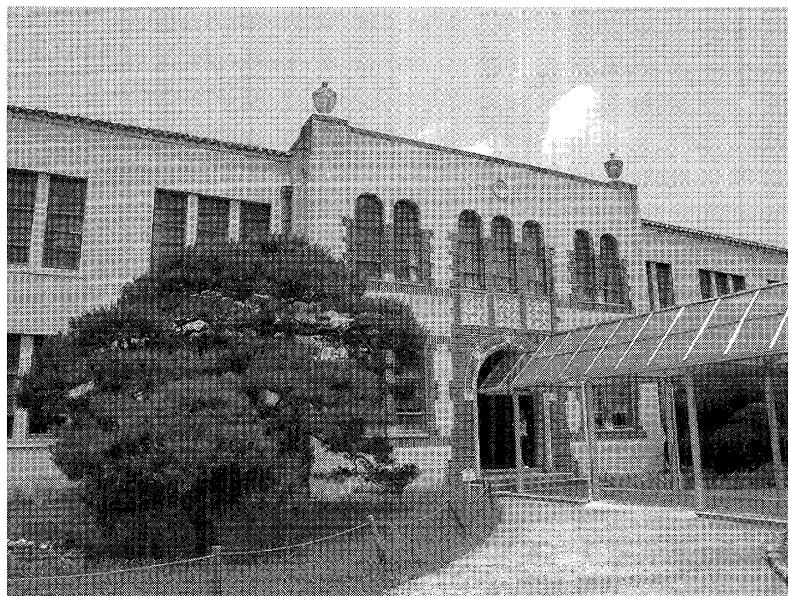


写真12 中高部校舎

く、わが国の学校建築のなかでもきわめて珍しい様態といえる。

第二は、4つの建物の正面がいずれも中庭に面して設けられている点である。文学館の設計図¹³をみると、中庭に面しては FRONT ELEVATION と明記されており、これは正面図を示す。一方で、文学館のもうひとつの立面図には REAR ELEVATION と明記され、「うしろ」あるいは「後部」すなわち背面図を意味する。ここからは、中庭側が正面であったことが判明する。理学館、図書館、総務館・ソールチャペルにしても同様だった。

ではなぜ、中庭に正面をむけて建物を配置することがおこなわれたのだろうか。欧米ではキャンパス内に最初に出来たクワドラングルが大学の中心と捉えられていて、「知の象徴」たる図書館は必ずそこに面して建てられることになっていた。クワドラングルとは「四角い広場」あるいは「学校の中庭」という意味がある。つまり囲まれた中庭ということになる。また、チャペルをクワドラングルに面して設けることも欧米の大学では一般的な手法であった。神戸女学院では図書館を中庭に南面させ、それに対して、総務館・講堂と一体化した複合建築のひとつであるソールチャペルの独立した玄関を、やや西側に偏るものの中庭に北面させていた。すなわち、神戸女学院では欧米のキャンパス配置の原則が忠実に踏襲されていた。その背景に、大学の中心たる中庭のエリアは、一般的な校舎のある場所とは異なり、より格式高い重要な場所であったという認識があったものと推測できる。そのために、自動車の進入路を設げず、歩行というアプローチが採られたものと考えることができる。そしてこのことがこの中庭のエリアでの静謐な空間の保持に繋がっていったとみられる。

神戸女学院の中庭についてさらに探求すれば、クワドラングルは図書館を中心とした計画によって生み出されたものであることが浮上する。当初の配置図¹⁴によれば、図書館の前面には車寄せの道路が描かれ、その両脇には左右に理学館・文学館が配される。このような様態からは、古典臭さはないもののイタリアの建築家、パラディオ¹⁵のヴィラの空間構成が想起される。図書館を神殿と喻えれば、このような手法は関西学院や東京女子大学でみられるように、キャ

ンパス計画の手法としては一般的なものであった。だが、神戸女学院だけが他の学校と異なった。コの字型の配置をとる他校では、導入の入り口部分は大いなるゲートを示し、建物はなにもない、いわば空白の場所だった。神戸女学院ではそこに、講堂とチャペルと総務館が一体となった複合建築が配置され、図書館に対面した。そのために四辺に建物が建つことになる。このことこそが、ある意味で中庭部分を完結した空間へと変換せしめ、ほかに見られないようなキャンパスのありように繋がっていったものと考えられる。

2) 建物の高さと中庭の大きさとの関係

ここで出現した中庭は、いわゆる人工的に統御された中庭ではなく、正確には中庭と名付けられるのかどうかは定かではない様態を示す。この中庭に足を踏み入れると、圧迫感がある訳ではなく、かといって中庭としての閉鎖力が消滅していることでもなく、程よく間の空間が広がっていることに気がつく。そのことは中庭と中庭を取り巻く建物とのバランスが関係しているものと考えられる。一般的には閉じられた中庭では、ある種の閉塞感を受けることは避けられない。ここではその陥穀から逃れるべく、中庭に面する建物高さにある工夫がなされていたものと推測できる。

まず、高さとの関係を探る。中庭の大きさはそこに面する建物の高さによって規定されるということが、ヨーロッパの広場を例にとれば、理解されるであろう。広場の大きさと建物高さの関係についての一般的な法則に、メールテンスの法則¹⁶があって、建物を仰ぎ見る角度によって、その関係は次の6つに分けられる。このことは視角と建物の見え方、ならびに囲み感の度合いを示すひとつの指標でもある。参考のために列挙する。

- ①塔のように特に高い建造物に対しては、70°の角度で見上げられる程度とする。建築物としての存在が強調される
- ②広場の大きさ、すなわち奥行きが建築物の高さと同一であれば、45°の角度で見上げ、建築物の細部を十分にみることができる。
- ③広場の大きさ、すなわち奥行きが建築物の高さの2倍であれば、27°の角度で見上げ、建築物全体の形を瞬時に認識できる。
- ④広場の大きさ、すなわち奥行きが建築物の高さの3倍であれば、18°の角度で見上げ、建築物の細部を見分けることはできないが、付近の建築物と比較して、その高低、釣合を鑑賞するのに適当である。立体的に囲まれているというより、場所の境界となる。つまり対象と背景が等価となる。
- ⑤広場の大きさ、すなわち奥行きが建築物の高さの4～5倍となれば、15°～14°の角度で見上げ、輪郭だけを眺めるにとどまる。閉鎖性が減少する。つまり対象は環境の一部となり一体化する。
- ⑥広場の大きさ、すなわち奥行きが建築物の高さの6倍となれば、9°の角度で見上げ、広場の閉鎖性の下限となり、8°になると閉鎖性は消失する。

神戸女学院の中庭を広場と見立て、その関係を検証する。中庭のどの地点に観察者が立つかによって、その角度は異なるが、ここでは観察者が立つ位置を中庭の中心地と仮定して考察をおこなっていく。現在、ここには円形の小池がある。

中庭の大きさは阪神大震災後の平成10(1998)年2月に作成された「神戸女学院実測平面図」¹⁷について、分一^{ぶいち}¹⁸で測れば、中庭の短辺方向は約48メートル、中庭の長辺方向は約72メートルあって、中心点は短辺方向では約24メートル、長辺方向は約36メートルの地点にある。

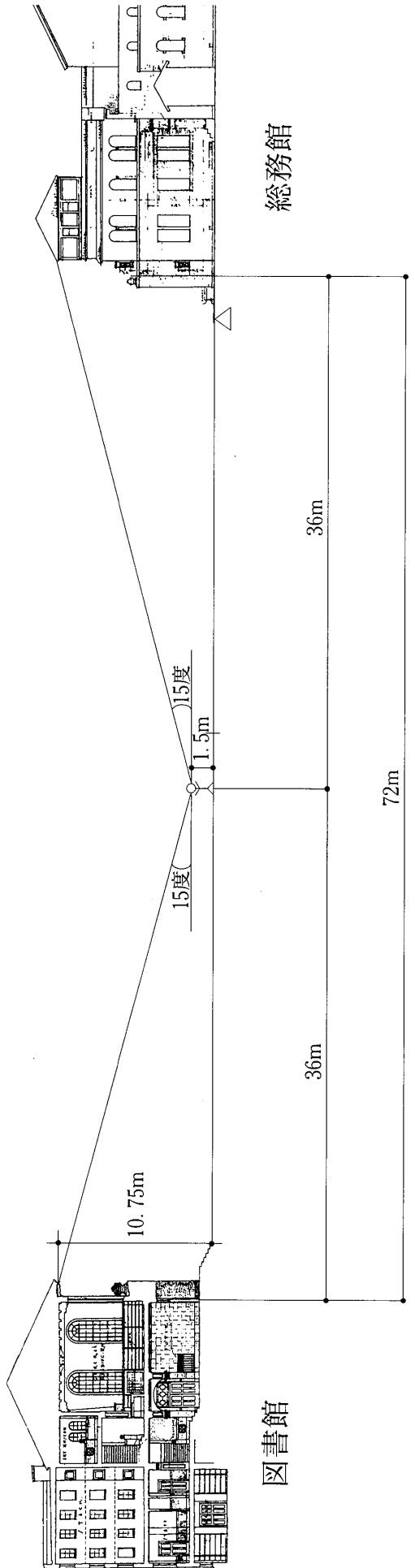
中庭に面する建物の高さをみる。その数値は文学館と理学館はともに基壇が2.5尺、約75.8センチメートルであり、一階の階高は13尺、約3メートル93.9センチメートルであり、二階の階高は12尺、約3メートル63.6センチメートルとなる。地面からの軒高さは27.5尺、すなわち約8メートル33センチメートルとなる。一方図書館は基壇と一階の階高は文学館・理学館と同じながらも、二階の階高は20尺、約6メートル6センチメートルとなり、地面からの軒高さは35.5尺、すなわち約10メートル76センチメートルとなる。

図5で示したように、その角度を解析する。高さは人間の目線、すなわち地面から約1.5メートルの地点での角度とすると、短辺方向の仰ぎ見る角度は約15度となる。前述のメールテンスの法則に当て嵌めれば、5番目のものに近い。一方、長辺方向の仰ぎ見る角度は短辺方向と同様に約15度となり、5番目のものに近い。すなわち、短辺方向、長辺方向ともに閉鎖性が減少するにふさわしい距離に基づいて配置されていた。また建物の高さが短辺方向、長辺方向でそれぞれ変えられていることからは、あきらかに設計する時点でこのような関係性が考えられていたものと判断できる。つまり、中庭の奥行や間口といった数値から、建物高さが決定されていたものと考えられる。

次に屋根勾配をみると、短辺方向の文学館と理学館はともに約25°の角度で屋根が構成されている。長辺方向の総務館と図書館とともに約25°の角度で屋根が構成されていた。すなわち二番目のものに近い角度だが、より厳密にいえば三番目により近づいた角度を示す。ここからは、屋根の瓦が視覚的に目に入ることがわかる。視界に入る建物の屋根面が見えることは人に落ち着きを与える効果があるとされる。だとすれば、そのような微妙なバランスが設計の際に考慮されていた可能性もある。

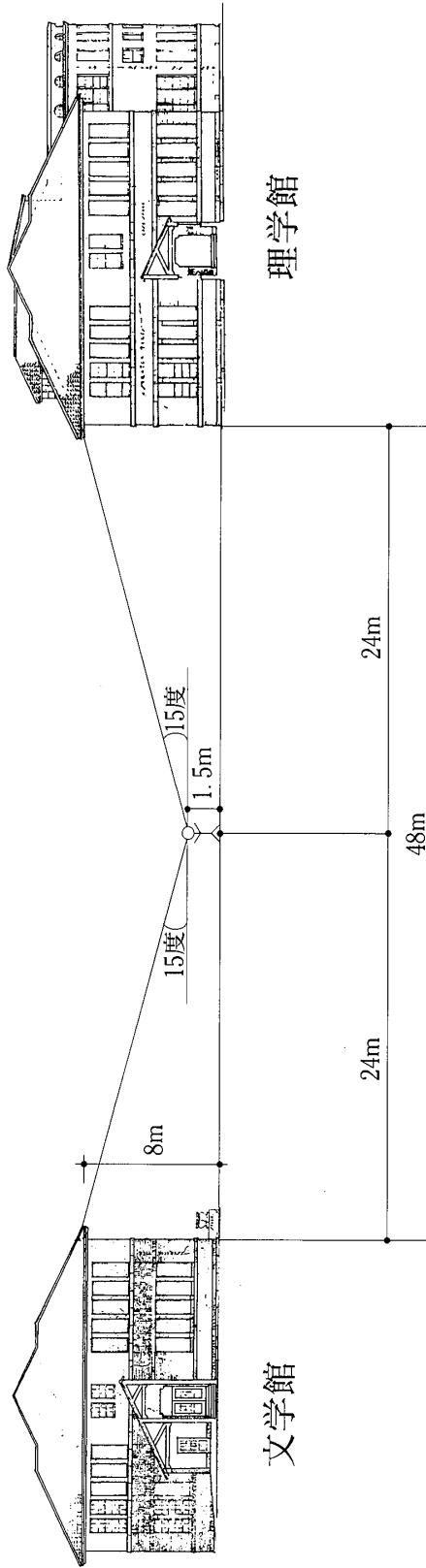
歴史的都市の広場と建物の関連を分析し、芸術的原理にもとづいた建物の高さと広場の幅の比率に関する見地を考察したオーストリアの建築学者、カミロ・ジッテ¹⁹によれば、広場の大きさは建築物の高さの2倍くらいが望ましいという。都市計画学者の武居高四郎²⁰は輪郭を見るには3倍くらいがよい²¹という。建築家、芦原義信²²は、建築を鑑賞するためには、建物正面の高さの2倍から3倍の距離が必要だと記した。そして、イタリアの名建築の前面には、そのような距離感に基づく広場があるとする。神戸女学院の中庭は短辺方向では3.47倍、長辺方向では3.35倍の数値となる。それらの数値は理想とされる高さの約3倍に近い。このようなことも、この中庭がバランスにおいて居心地のよい空間を造り出した理由のひとつだろう。

ちなみに、ここでの中庭の形状を検証すれば、短辺方向と長辺方向の比率は1:1.5となる。ヨーロッパの都市の広場では一般にその比率は1:3位²³が多い。このような数値は建築物を鑑賞するという目的からきた一面もあって、以上の解析してきた知見をまじえ判断すれば、こ



2. 南北断面図

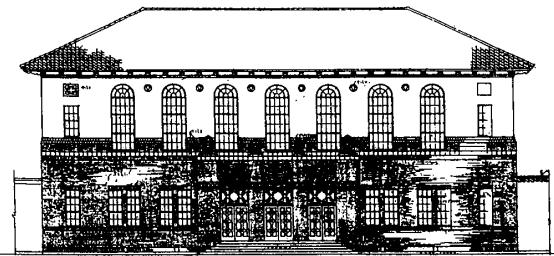
S1 : 500



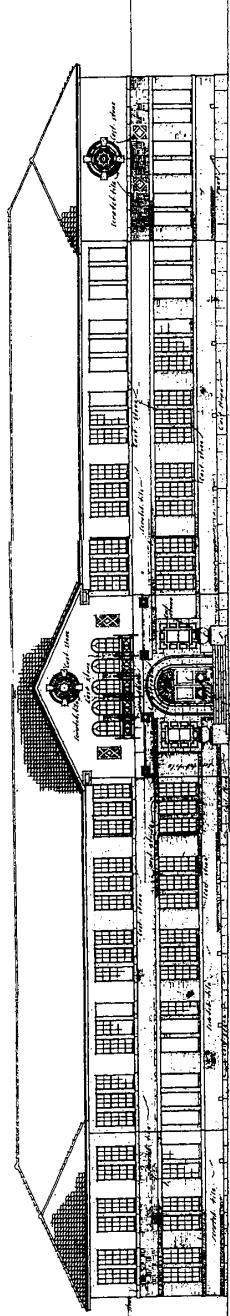
1. 東西断面図

S1 : 500

図5 「中庭と建物の関係」 S1 : 500

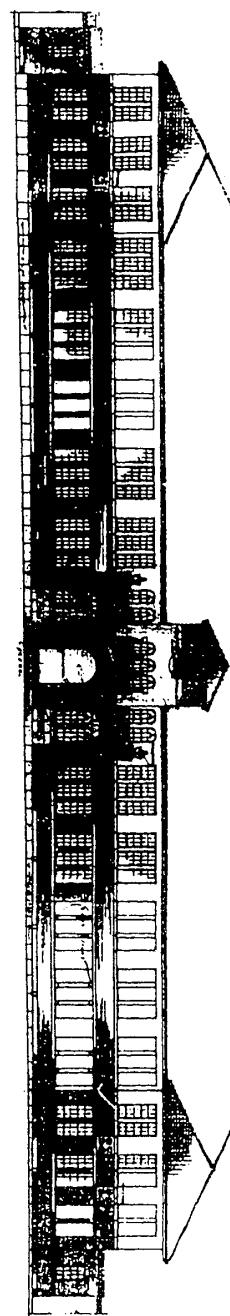


図書館



文学館

中庭



理学館

體育館

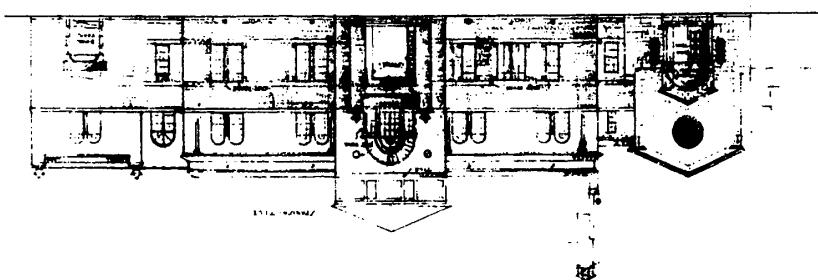


図6 中庭に面した建築のファサード S 1:500

こでもそのことが考慮されて配置設計がなされたものと判断できる。

3. ファサードの分析

1) キャンパス全体の意匠

キャンパス内の学舎については、ほぼ共通する意匠と仕上げが用いられていた。基壇・主階・アテックの三層構成に則ったファサード構成を示す。ここでの基壇は基礎部分から一階全部に二階の腰壁まで、基礎は御影石、二階の腰壁まではスクラッチタイル貼りとなる。主階は二階腰壁より上部を指し、リシン搔き落し仕上げとなる。アテックは勾配屋根を指し、S型瓦が載る。音楽館は3層の階数となり、4層目はセットバックし、前面が屋上バルコニーとなる。さらに4階上部には2層の塔屋がそびえるという高層建築となるが、ファサードの構成は中庭に面した建築と共通する。

一方で葆光館と称せられた高等女学校校舎は傾斜屋根が採用されずに、陸屋根となっていた。また壁面の扱いに関しても、スクラッチタイルの使用は玄関廻りのみであって壁面は皆、リシン搔き落し仕上げとなる。なぜ、このようにここでは建築スタイルが簡略化されたのかは定かではないが、大学部の建物にくらべ、着工が遅かったことで、工費に余裕がなくなり、屋根が省略されたという話しが伝わる。あるいは、高等女学校という中等教育機関の性格が考慮され、大学部の中庭に面した建築ならびに音楽館と差異がつけられ、装飾の密度がより簡素になったものと考えることも可能だ。

2) 意匠

歴史的意匠にもとづく造形言語によって、ファサードがデザインされていることが特徴である。玄関廻りに装飾的な意匠が集中する。まず、図書館正面のように柱廊玄関、すなわちポルティコ的な扱いが表れている。対置する総務館では玄関部が前面に突出する。またソールチャペルでは三角形の切り妻破風の下に三角形のポルティコを設け、内側はアーキヴォールトとなる。玄関廻は文学館や理学館ではより簡略化されている。また、玄関上部にはバルコニーが設置されることが多い。そこにはベイス（飾壺）が付く。また手摺りはトレサリー（透かし模様）が入れられる。最上部は総務館や理学館のように塔屋的な扱いとなる。外壁の仕上げについても、スクラッチタイルを用いた壁面装飾がみられ、共通して小屋組み換気口廻りには薔薇窓をモチーフに抽象化されたデザインが表現されていた。開口部の形状についてもアーチとなることが多く、理学館や講堂のようにダブルアーチが採用されたり、総務館のようにヴェネツィアン・アーチが用いられるなど、ファサードの意匠を整えることがおこなわれていた。

このようにみてくれば、スペニッシュ・ミッションやイタリアン・ヴィラ、あるいはチューダー・ゴシックといった西洋の歴史様式が混在して用いられている点に気付く。けれどもなによりもそれらが持っている立体的な感触は見出せない。むしろ平板的なグラフカルな印象である。その結果、個々の学舎としては共通して比較的地味なスタイルを示す。

結

- (1) 神戸女学院のキャンパスの最大の特質は中庭、すなわちクワドラングルの空間が用いられている点にあり、そこに配された建築のいずれもが中庭を正面としていることがある。
- (2) 中庭の空間的な魅力を支えるものに、中庭に面する建物高さと中庭の広さとの関係がある、中庭の短辺方向・長辺方向のいずれもが仰角15°前後になっている。このため中庭の閉鎖性が減少し、対象は環境と一体化する。
- (3) 中庭に面した建築は3層構成のファサードとなり、そのことは岡田山キャンパスの建物全体に通底するスタイルである。また中庭に面した建築は細部の意匠は微妙に異なるものの、違和感なく連続する意匠となる。
- (4) 配置計画は南北に軸線がとおされ、機能別に3つにグルーピングされた建物配置をみせる。それは土地の高低差や形状を巧みに読み込ませたものになる。また自動車による動線と歩行による動線を巧みに使い分けることで、静謐で格調高い中庭のエリアの創出に成功している。
- (5) 神戸女学院のキャンパスの魅力は、第一は自然と調和がとれた配置計画、第二はキャンパス全体の景観の統一、第三は意匠的に微妙に異なりつつも根底で共通する建築スタイルの校舎、の3点によるものだと考えられる。現在のキャンパスの多くは昭和8（1933）年に完成したものであり、その後に建設されたものも共通するスタイルを採用することで、キャンパス全体の景観に統一感が生まれた。

後書き

ここで出現し、現在も維持されているキャンパス空間が20世紀前半の日本の女子高等教育施設が持ち得たひとつの到達点だったのではなかったのかとおもえる。

注

1. 建築史家、山形政昭による一連の研究がある。
2. 川島智生「神戸女学院学舎の建築史学（I）—計画されたキャンパス—」『論集』第51巻第1号、神戸女学院大学研究所、2004.7、川島智生「神戸女学院学舎の建築史学（II）—計画されるキャンパス山本通の学舎（1875～1933）—」『論集』第51巻第3号、神戸女学院大学研究所、2005.3
3. 戦後に設置された東門ではなく、現在の谷門のことである。
4. 神戸女学院同窓会会誌『めぐみ』、昭和5年12月
5. 明治42（1909）年の地形図から読み取れる。註1の「神戸女学院学舎の建築史学（I）—計画されたキャンパス—」に示した。
6. 一端が行き止まりの袋小路ではあるが、自動車の方向転換が可能になっている小街路を指す。住宅地設計において人と車を分離するために多く用いられる。
7. 明治44（1911）年の西宮での陸軍演習時に訪れた。この土地の元所有者の桜井子爵は学習院で大正天皇とは知遇があった。
8. 当時は上海で建築事務所を開設していた。ヴォーリズとは異なり、正式な建築教育を受けたアメリカ出身の建築家。
9. チェコスロバキア出身の建築家で、アメリカのフランク・ロイド・ライトの弟子となり、帝国ホテル

建設に伴い、来日し、日本で建築事務所を自営する。

10. のちに周囲を買い足し、合計3万4千坪となる。
11. アントニオ・レーモンド『自伝アントニオ・レーモンド』鹿島研究所出版会、1970
12. 現存する増毛町立小学校（1936）やすでに解体された函館市立谷地頭小学校がある。
13. ヴォーリズ建築事務所の図面類は現在、大阪芸術大学に寄託される。神戸女学院関連の設計図については、複製品が神戸女学院大学総務部に所蔵される。
14. 神戸女学院総務部所蔵の「Layout of kobe college No 1」と記入がある配置図による。
15. イタリアの後期ルネッサンスの建築家で、古典様式を住宅として復活させた。
16. 武居高四郎『都市計画』共立出版、1958、ならびに、『かたちのデータファイル』彰国社、1984、による。
17. 神戸女学院総務部所蔵
18. 図面の上に物差しをあてることで、その長さを測ることをいう。
19. 前掲16. の武居高四郎『都市計画』共立出版、1958、による。ジッテの著作に『広場の造形』鹿島出版会、1983、がある。
20. 京都大学工学部土木学科都市計画教室の初代教授で、日本の大学で最初の都市計画講座だった。
21. 前掲16. の武居高四郎『都市計画』共立出版、1958、による。
22. 『街並みの美学』岩波書店、1979。
23. 前掲16. の武居高四郎『都市計画』共立出版、1958、による。
24. 元ヴォーリズ建築事務所の石田忠範氏の御教示。

謝辞 東京女子大学ならびに活水女学院大学には調査の際に御世話になりました。

（原稿受理 2007年4月2日）